



# まちづくり研究センター報告書 2020年度

---

## 祭りが開催されないことの意味

～カイヨワ『聖なるものの社会学』から～

まちづくり研究センター長

古市 太郎

2020年11月30日現在でも、covid-19が世界各地で蔓延している。その影響から、ドイツ・ケルンの「クリスマスマーケット」やフランス・ストラスプールの「クリスマス市」も開催されないことが決まっている。東京都・文京区においても、自粛ムードや「三密回避」などから、つつじまつり、あじさいまつり、菊まつり、例大祭、子どもイベント系はすべて開催されていない。一般的には、こうした状況に対し、「つまらない」、「まちが盛り上がらない」、「楽しくない」などという声が地域から漏れ溢れている。果たして、祭りが開催されないことは、われわれ人間に対し、どういう意味を持つのであろうか。そこで、covid-19がパンデミックとなっていることから、この意味を、ロジェ・カイヨワの文明史視点から考えてみたい。

### 聖なる感情：魅了と畏怖の感情

カイヨワの『聖なるものの社会学』によると、祭りは戦争と似ており、日常で蓄積されたものを使い尽くす「濫費」という点において類似しているという。「戦争と祭りとは、どちらも動揺と喧騒、そして大いなる会合の時期である。そしてその間、貯蓄経済は濫費経済によって代られる。そこでは交易や生産によって蓄積され、営々として手に入れたものが、惜しげなく消費され、破壊される」（カイヨワ 1951=1971：212）。日常生活での貯金がいい例だ。日々、将来のためお金を貯めていく日常生活を送りながら、その儉約生活に対し、バカンスで旅行したり、奮発しておいしい料理を食べに行ったりして非日常を味わう。

さらに、祭り・戦争を、「周期」、「道德律」、そして「参加意識」から比較してみよう。

周期についていえば、戦争期間と戦争以外の期間（平和・日常）との周期は、祭礼と祭礼以外の時期（俗なる時期・日常）の周期を再現し、祭り・戦争どちらも激しい情動の期間といえる。時間感覚として、未来の目的のために現在が存在するという直線的時間ではなく、循環的時間である。

道德律でいえば、戦争期間は人を殺すことができるし、また殺さざるを得ない。しかし、戦争が終われば殺人行為は最も重い罪となる。祭礼に関すれば、その期間は熱狂的に振る舞い、物事を濫費し瞬間に没頭し没我してしまうが、その期間が終われば、その物は濫費から貯蓄へと移り、日常の規則的な生活に戻る。戦争・祭り期間中は、価値観の根底にあるパラダイムが大きく異なっている。

参加者意識では、祭礼に参加する者は、そこで自己の高揚を感じ意識し、没我状態に陥る者さえい

る。同じく、戦争へと参加する者も、自分の現状の価値基準とは違う物差しで評価されることへの高揚感に駆り立てられる。

この三点において、祭礼と戦争の類似性が見て取れる。それは、日常生活の自分を超越し、自分自身の現状から抜け出ることを可能とさせるものを意識するということである。その芽生える感情が、聖なる感情である。ここでの聖なる感情とは、道徳的に良いというものではなく、自身の存在を揺るがすことに魅了されると同時に畏怖を抱く感情のことである。「戦争は、すぐれて聖の本質的な性格を帯びている……聖は魅了と畏怖の根源だとみられている。戦争もそれが魅了的・畏怖的な存在として示される限り聖なるものとして受け取れる」(カイヨワ 1951=1971: 100,104)。

### 他者との融合への意欲

カイヨワの分析によると、戦争・祭りが日常生活に向かってくるとき、そこで人々は聖なるものを感じる。日常で過ごしていた自分を脱ぎ捨て、日常とは違う価値観に入り込まれている「自分」を感じる。祭りやイベントに参加する際に湧き出てくる、あのワクワク・ゾクゾク感だ。祭りでのワクワク・ゾクゾク感は、主観的なレベルでの「楽しさ」「面白さ」「畏れ多さ」だけではなく、その楽しさは次のような意欲の現れなのだ。その意欲のあり方の違いが、祭りと戦争の根本的な違いとなる。

「本質的なのは、祭りが本来的に〈融合への意欲〉であるのに対し、戦争はまず〈保身への意欲〉だという点にある」(カイヨワ 1951=1971: 222)。祭りの場合は、人々が自身の高揚を意識し、互いの関係を建設的にする可能性がある。バラバラな個人を互いに融合しようという向きを与える。それに対し、戦争の場合は、他の人々に勝利し、従えよう意識し、互いの関係を破壊する可能性が強い。その結果、個人間に主従関係がもたらされる。

人間の社会は、日常生活・俗なる世界と非日常生活・聖なる世界からなり、交互あるいは順次に構成される。いいかえれば、貯蓄経済からなる日常生活を転換するものが、戦争・祭りだ。その祭りがなくなることは、どういうことか。それは、循環の歯車が壊れ、その日常生活の延長線上に、自身の保身の意欲から、他者との競争あるいは他者を支配する戦争だけしか存在しないことになる。他者と融合あるいは融和しようという意欲させるものがなくなるのだ。

もうおわかりであろう。祭りがなくなることの意味を。それは、他者と融合しようという「意欲」および機会が無くなってしまい、他者を従えようという意欲から人間関係を捉えるだけになってしまう。そして今、将来のための貯蓄からなる日常生活と他者を従えようという意欲からなる非日常生活を送るという「新しい生活」が、われわれの「日常生活」となりつつある。たかが祭り、されど祭りなのである。

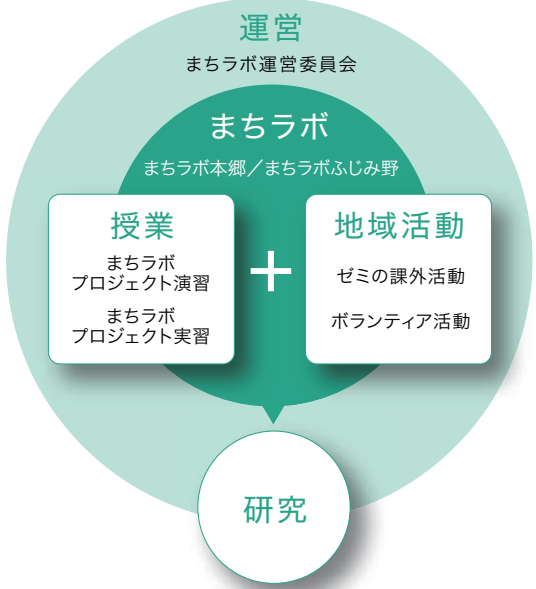
【参考文献】 ロジェ・カイヨワ 1951=1971 『聖なるものの社会学』 弘文堂

# 「まちラボ」とは

## 「まちラボ」の理念と目的

「まちラボ」とは、「まちづくり研究センター」（英語表記名は Social Design Center）の略で、本学の建学の精神「自立と共生」に基づく共生社会の構築を目指す「実験空間」である。この空間は、本学人間学部 コミュニケーション社会学科の基盤となる教育理念を備えた「教育・研究の場（研究所）」でもある。教育は、授業、ゼミの課外活動、ボランティア活動などの中で展開され、教員が中心となる研究活動へと発展していく。

「まちラボ」では、社会課題、とくに社会的「距離・不平等・格差」に対し、共生社会の構築に向けた国内外での社会貢献型プロジェクトの企画・運営を、学生が主体的に「産・官・学・民」の体制から取り組み、成果を社会に還元することを目指していく。



まちづくり研究センター概念図

## 「まちラボ」の活動

「まちづくり研究センター（まちラボ）」は、2019年4月、これまで以上に活発に、社会の課題に取り組む産官学民連携型学習を進めるために開設された。

本郷・ふじみ野両キャンパスに拠点があり、ふじみ野では郊外型（1-2年生）、本郷では都市型（3-4年生）の社会問題をテーマに取り組む。学生たちは、キャンパス内では見えてこない実社会の課題に対し、地域や企業、行政の方々と協働しながら取り組んでいくのである。

ふじみ野キャンパスでは、課題解決に向けた基礎力（コミュニケーション能力、チーム力など）の育成強化を図る場として、都市—農村交流による農村地域の活性化、空き店舗問題などの社会問題に取り組んでいく。これらは単位化される科目ではなく、すべてボランティアとしての活動となる。

本郷キャンパスでは、人間学部コミュニケーション社会学科の授業である「まちラボプロジェクト演習」、「まちラボプロジェクト実習」というプロジェクト型学習を軸に、貧困問題、コミュニティ形成、環境保全、芸術の経営、スポーツとまちづくりなど、多様なテーマから課題を選び、理論と実践を相互に学習しながら、新たな社会の形成に必要な社会の仕組みを創造する力を養っていく。

2020年度はコロナ禍にあり、授業もボランティア活動もオンライン化という新たな試みの中で進められた。教職員も学生も、大変な労力を伴いながら技術を習得したオンライン化ではあったが、地域との密接な関係を築くには物足りなさが残るものでもあった。

## ● ベースキャンプとしての「まちラボふじみ野」

「まちラボふじみ野」の活動は、地域に出ていくことが多い。学生たちは同じ活動を行うチームであり、教職員のサポートの中、これからやることを話し合い、形作り、必要な物を集め、準備、練習などを行う。それは、高い山に登る前にしっかりと準備をする登山と共通するものがある。また、「まちラボふじみ野」の活動はボランティアであるため、制限も少なく、自分らしさを思う存分に発揮することができる。同時に、意見が合わなくて悩み、多少の諍いも起こる。学生たちは、活動の最前線へ、ベースキャンプ「まちラボふじみ野」から出発するのである。

また、初めて大人と話し合う機会を持つのもこの活動からである。最初はうまくコミュニケーションが取れなくて戸惑うが、そのうちに、ちゃんと地域の大人と仲良くなっていく。テクニックではなく、自然に話し合いができるようになっていく経験は、初めての「他者との融合」体験でもある。

2020年度は、これらがオンラインで進められ、オンラインワークショップも実現した。

## ● サードプレイスとしての「まちラボ本郷」

ガラス張りの2部屋にひとつひとつ物語のある家具・設備を配置した「まちラボ本郷」は、教室だけ教室ではない場所である。しかし2020年度は、9月後半の後期を迎え、少しずつ授業として利用されるようになるまでは、ただのガラスの箱だった。「まちラボ本郷」に灯りがともると、初めて来た3年生たちの表情も輝き、すぐに部屋になじんでくれた。

「まちラボ本郷」は、様々なプロジェクトを進める学生、教職員、地域の方々が、様々な目的で訪れる。教室でもない自宅でもない、サードプレイスとして位置づけられている。毎日お昼ごはんを持ってプロジェクトを進めに来たり、ゼミや授業の先生を巻き込んでキッチンを利用した学生たちの話には、キャンパスツアーで来校した高校生も耳を傾けてくれる。3年生の1年間を「まちラボ本郷」で過ごした4年生は、授業以外では入室が禁止されているにもかかわらず、入校すると「まちラボ本郷」の外まで来てくれる。

これからも学生たちにとって「まちラボ本郷」が、行ってみたい場所、また行きたい場所、帰ってきたい場所となってくれることを、心から願っている。

## まちづくり研究センター 担当教職員

### まちラボ本郷運営委員会

センター長：人間学部コミュニケーション社会学科／古市太郎

運営委員：経営学部／新田都志子、外国語学部／芳賀和恵、人間学部人間福祉学科／青木通

アドバイザー：島田昌和理事長 研究員：森下英美子

### まちラボふじみ野運営委員会

副センター長：人間学部コミュニケーション社会学科／中山智晴

運営委員：児童発達学科／菖蒲澤侑、人間福祉学科／田嶋英行・武田和之、心理学科／文野洋、

コミュニケーション社会学科／岩館豊、 研究員：栗原真史 事務担当：渋谷由佳

## 芸術のマーケティング

### ■ 演習担当教員、学生

島田昌和・小西孝典、学生 13 名

### ■ 連携先

東京芸術大学後援アートマーケット KOMOGOMO 展活動委員会

### ■ プロジェクト概要

このプロジェクトは、東京芸術大学出身の作家が主催する KOMOGOMO 展とコラボをして実施した。2015 年から、東京都の上野恩賜公園で芸術作品の展覧会やコンサート、ワークショップを定期的で開催している。このプロジェクトを実施する背景として、KOMOGOMO 展が抱える課題がある。それは、「芸術をもっと身近に感じてほしいこと」「アートにまだ触れたことがない層である若者にもアートの魅力を伝えたいこと」「KOMOGOMO 展を目的に来る人を増やしたいこと」などがある。

今年度は、本プロジェクトの学生メンバーもサポートとして参加し、学生の視点で上記目的の改善策を実施する計画であった。かなりの人数が集まる空間に学生を出すことは本学のコロナプロトコルから言って難しいと判断し、通常授業内で、個別アーティストの学内ワークショップ「ミニコモゴモ展」に変更することにした。

実施概要としては、12月5日(土)10:00～17:00に3人のアーティストごとにワークショップを開催し、小さい子どもから大人までアートにふれてもらった。同一時間内に教員1名、主催者1名、アーティスト1名の3名に限定した。学生は5人に限定してアーティストごとに入れ替えた。ワークショップは、①高瀬大輔先生の「花を贈るジュエリー」、②松永小百合先生の「タティングレースに挑戦しよう!!」、③杉山佳先生の「和紙のしみどめを使った日本画ワークショップ」であった。ワークショップ参加者に実施したアンケート結果から、チラシを見て参加した人が多く、地域の人が多いことが分かったが、ワークショップ参加者のほとんどが「KOMOGOMO 展に行ってみたい」と答えていたため、KOMOGOMO 展の課題であった「KOMOGOMO 展を目的に来る人を増やしたい」ということに少なからず貢献できたといえる。「ミニコモゴモ展」を終えて、アートは敷居が高いと思われるがちなものを、一般の学生がアーティストとお客さんの間に立つことで、お客さんにとってアートに触れやすい環境づくりができたと思う。

本プロジェクトは来年度の活動も視野に入れており、SNSの運用を今後とも継続していきたい。

詳しい内容は  
本学ホームページで  
ご覧いただけます。



高瀬大輔先生の「花を贈るジュエリー」ワークショップ

## ねこっちゃんビデオ通信～文京 Deep な人

### ■ 演習担当教員、学生

坂口博樹、学生 12 名

### ■ 連携先

有限会社「岩夢」(映像制作会社)、地域連携ステーション「フミコム」(文京区社会福祉協議会内)、地域情報発信カフェ「Rural Coffee」(向丘1丁目文京学院大学そば) 文京メディアブリッジ合同会社、地元の町会、商店会、地域の方々

### ■ プロジェクト概要

「ねこっちゃん」は「根向千山」。本プロジェクトでは、学生が根津、向丘、千駄木、白山(+本郷、弥生、西片)地区の人々と関わり、地区の今と歴史を知り、そこに住むキーマンや面白い人を毎月ビデオで紹介する映像コンテンツを制作している。

地域に根ざして暮らす人や活動する人に、地域の歴史や思い出、今の生活、町の現状、町についての思いなどを語っていただき、それを撮影する。ゲストによって地域をさまざまな視点から取り上げ、リアルな感覚を視聴者に伝え、それを記録するアーカイブ的な作品作りを目標としている。

基本的な撮影・編集技術を身につけ、年間5本の制作を目指したが、今年は新型コロナウイルス感染拡大の影響で予定していた撮影がこなせなかった。本年度は学生自身が撮影した1作をオンライン開催となった文京映画祭にエントリーする。また去年は映画祭が中止となったため上映できなかった昨年度の学生作品も合わせて出品する。



ねこっちゃんキャラクター

詳しい内容は  
本学ホームページで  
ご覧いただけます。



### 2020 年度の作品は

- ・千駄木の「旧安田楠雄邸庭園」にて、同園マネージャーで谷根千工房の仰木ひろみさんインタビュー(残念ながら今年度学生の撮影は本作のみ)。
- ・地域情報発信カフェ「Rural Coffee」にて、オーナーの坪田莉来さんと、向丘、西片の歴史に詳しい近所に在住の川口勝子さんインタビュー(学生はリモートで参加し監督、司会も行った。撮影は教員。)
- ・根津教会役員の内山雅之さんにインタビューする予定だったが、急な新型コロナウイルス感染拡大のため中止となった。

\*以下は学生の要望に従って教員が撮影した

- ・本郷の歴史に詳しい忍足俊俊さんによる、本郷菊坂案内。
- ・一般社団法人せんとうとまち代表理事で、文京区の古い町や銭湯事情に詳しい栗生はるかさんに、廃湯した白山の「富士見湯」などの話を伺った。

以上の作品を学生が教員と協力して編集。



旧安田楠雄邸庭園にて。仰木ひろみさん(右から3番目)、連携企業、有限会社岩夢の映像ディレクター岩崎正昭さん(左端)と。

## 文京まちあるきコースづくり

### ■ 演習担当教員、学生

貫井万里、学生 14 名

### ■ 連携先

文京区アカデミー推進課、文京ふるさと歴史館、  
NPO 法人たいとう歴史都市研究会、合同会社 Vanta

### ■ プロジェクト概要

詳しい内容は  
本学ホームページで  
ご覧いただけます。



文京まちあるきコースづくり「文京区の魅力の発信と発見」プロジェクトは、私たちが通うキャンパスが位置する、東京都文京区のだざまな分野の魅力をお散歩マップコースで紹介するプロジェクトである。文京区は、さまざまな魅力が溢れている街であり、本プロジェクトにおいて 2020 年度は、文京区の、「歴史・文化」、「カフェ」、「聖地・植物」をテーマに 3 つのまちあるきコースを作成した。

「いきちよんコース」は、江戸・明治時代の文京区の歴史をテーマとしたコースである。コース名の「いきちよん」は、江戸時代の庶民の間で使われていた言葉で、「少し粋な」という意味がある。「聖地・植物コース」は、小説やアニメの聖地と緑あふれる都会のオアシスともいえる庭園を紹介したコースである。「カフェ・コース」は、文京学院生や文京区を訪れた人々の居場所や思い出の場所になりそうな文京学院から近いカフェを紹介したコースである。



文京ふるさと歴史館の展示品の説明を受ける様子

前期は、それぞれのコースで訪問する場所を選択し、メンバーが担当する見所スポットの歴史や概要などを調査し、紹介文をまとめた。後期は、前期に調べた見所スポットを 10 月に実際に訪問し、マップに掲載する場所をさらに絞り込み、地図作りと、パンフレットの紹介文作成を実施した。合同会社 Vanta コンサルタントの北爪秀紀先生から 4 回にわたるワークショップで、Photoshop による地図作成についての指導を受けた。同時にメンバーが見所スポットのご担当者に連絡し、パンフレットの掲載許可を頂き、作成した紹介文の確認・校正をお願いし、一字一句間違いのないよう細かい校正作業を行った。



たいとう歴史都市研究会の紹介でお店に改装された上野桜木の古民家

連携先とのイベントとして、10 月 25 日（日）に NPO 法人たいとう歴史都市研究会主宰の「田中邸を味わう会」に希望者 3 名と担当教員が参加した。同研究会理事長の椎原晶子様から古民家の維持と再生、まちづくりでの活用方法についてお話を伺った。11 月 12 日（木）に文京ふるさと歴史館に希望者 6 名と担当教員が訪問し、学芸員の東條幸太郎様から、文京区の歴史や縁の文豪や作品についてご説明を頂きながら、展示品を鑑賞した。11 月 26 日（木）に文京区アカデミー推進課の猪岡君彦・観光都市交流担当課長より、「文京区の観光政策とその実践」についてオンラインでのご講演を頂いた。

また、本報告書編集中に、読売新聞社からの取材があった。



## つくる責任・つかう責任 ～捨てられないビニール傘の開発を目指して～

■ 演習担当教員、学生

中山智晴、学生 11 名

■ 連携先

大谷清運株式会社

■ プロジェクト概要

【目的】

本プロジェクトの最終目標は、SDGs の達成を目指し、17 の目標のうち、「12. 作る責任・使う責任」、「14. 海の豊かさを守ろう」「15. 陸の豊かさを守ろう」を達成することにある。現在、海洋プラスチックにより生態系が脅かされるなど、世界の陸・海域でプラスチックごみの廃棄が大きな問題となっているため、本プロジェクトでは、身近な生活用品としてビニール傘に着目し、

1. 廃棄されるビニール傘の削減
2. 廃棄されてしまったビニール傘の回収・リサイクル
3. 廃棄されにくいビニール傘の開発

をリサイクル系企業の大谷清運(株)と連携することにより実施することを具体的目的としている。

【社会的背景】

海ごみの7～8割はプラスチックごみである。不十分な管理により、流出したプラスチックごみの一部が海岸に漂着している。1960年代から、海洋生物がプラスチックを食べてしまう報告が上がっている。特にクジラ、ウミガメなどの報告例が多い。プラスチックに含有、付着した化学物質を海洋生物が摂食した場合、海洋生物への悪影響が懸念されている。また、最近の研究から海中のプラスチックから様々な化学物質が海洋中へ溶出されることが判明している。

【活動概要】

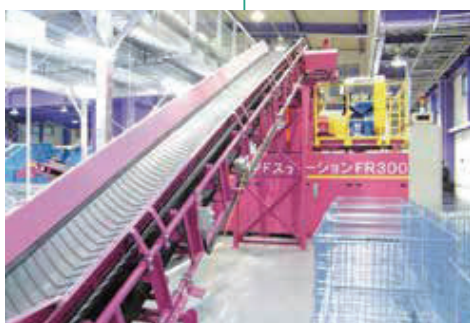
各グループに役割を分け、「捨てられない傘作り」を進めるために、学内の大学生に環境意識調査を実施し、捨てられにくいビニール傘の開発アイデアなどを調査・研究している。

これらの結果を踏まえ、プラスチックが生態系に与える影響、廃棄ビニール傘の現状などを啓発するための、環境教材づくり、ポスター作り等を行っている。また、どのような傘が捨てられにくいのか等の考察や調査結果等を、多くの人に伝える取り組みを実施している。

【課題】

今年度はコロナ禍で実施されたため、文京区主催のエコ・リサイクルフェアを含め、すべてのイベントが中止となった。その結果、調査研究成果を社会へ還元する機会を大幅に失ってしまった。一方、オンラインを活用した勉強会、見学会、あるいは、研究成果の還元など、新たな発見もあった。来年度は、オンラインをさらに活用した新たな取り組みを検討していく予定である。

詳しい内容は  
本学ホームページで  
ご覧いただけます。



大谷清運株式会社によるオンライン工場見学会  
(中間処理工場における廃棄物の選別、圧縮梱包、破碎、圧縮固化の学習会、および適切な処理、再資源化に関するワークショップ)

## 「スポーツ」があるまちづくり

### ■演習担当教員、学生

青木 通、学生 11 名

### ■プロジェクト概要

当初は、プロジェクト内プロジェクトとして、①だれでもできる「スポーツダーツ」の普及促進企画、②スポーツが苦手な子どもに対する出前指導サービスシステムの構築（個別対応型のスポーツデリバリーサービス）、③総合型地域スポーツクラブの設立企画といった3つのプログラム実践を想定してスタートした。しかしながら、新型コロナウイルス感染症によりフィールドワーク実践に影響を受けたことから、前前期半はプロジェクトメンバーと実現可能な内容についてミーティングを重ねた。そこから、都心部において健康やスポーツを通じたコミュニティ形成を意図したイベントを企画し、本格的に動き出した。また、プロジェクトのねらいについても、「大学の施設を拠点としたスポーツプログラム・イベントで地域住民が集まる居場所を作る」として新たに設定した。最初の取り組みとしては、スポーツによるまちづくりやコミュニティ形成に関する事例を収集し、その分析から具体的な企画内容について検討を行った。結果として、①スポーツダーツ大会の定期開催、②ヨガ・エクササイズなどの健康教室の開催、③eスポーツを活用した競技会の開催、④まちラボを起点としたウォーキング・ジョギングマップの作成が候補としてあがり、実現の可能性を含めた詳細な検討を加えた。

詳しい内容は  
本学ホームページで  
ご覧いただけます。



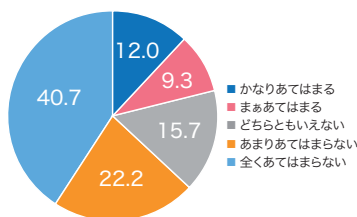
オンライン授業

後期は、新型コロナウイルスの感染状況が改善しないため、企画実践については断念せざるを得ない状況となり、地域住民を対象とした、健康・スポーツや地域交流に関する実態調査を行い、この結果からプロジェクトのねらいを検証していくことにした。調査票は、「健康に関して気をつけている内容および気をつけたい内容」「健康に関する情報の必要性や入手方法」「地域交流活動の参加状況」「運動・スポーツの実施状況」等から構成し、文京区に在住する20歳以上の成人を対象として、インターネット調査を実施した。調査期間は12月中旬から下旬であり、サンプル数は100名とした。得られたデータは、単純集計による全体傾向、そして、性別および年齢別による項目間のクロス集計、健康認識および運動・スポーツの実施頻度と地域交流活動のクロス集計から分析を行っている。

想定外の事態となったためにプロジェクトの変更が重なり、予定通りに進めることはできていないが、必要

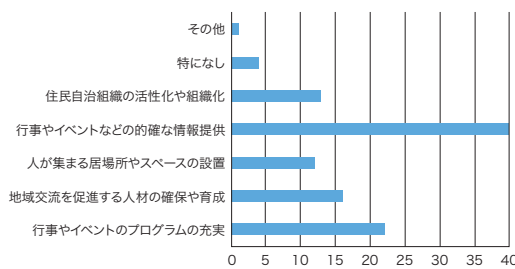
### 運動・スポーツの実施状況

【実施状況（運動習慣者）】：  
あなたは、運動やスポーツを実践していますか？



アンケート調査結果

### 地域交流の重点ポイント(N=108)



最低限の成果は得られると考えている。(株)ダーツライブ、NTTコムオンライン・マーケティング・ソリューション(株)にはご協力をいただき、感謝申し上げます。

# 「コロナ禍」での社会貢献活動とは ～「SDGs」の17の目標に基づいて～

## ■演習担当教員、学生

古市太郎、学生 12 名

## ■プロジェクト概要

### 【企画案】

学生の皆さんとともに、マスクを作成し、寄付先を探しながら、ささやかな社会貢献をしていくことを目指す。一般からしたら、何の変哲もないマスクを手に入れない人たちがいることも事実だ。そして、想像できないような理由から、そういう状況に陥ってしまうことも事実だ。そのありきたりな「マスク」づくりを通じて、社会を観ていこうとするのが、このプロジェクトの本意である。

### 【修正された計画案】「コロナ禍」での社会貢献活動とは

5月と6月は、「マスクの効用」・「各国のマスクの普及具合」・「アベノマスクの費用・普及・問題点」を調べ、実際に予算2,000円内の中で、マスク作成にも携わった。

しかしながら、学生間でいろいろと話しあい、企画（個店への支援、学習サポート、寄付など）を練ってきたが、そのたびに、「コロナ禍」と「三密」に跳ね返され、社会貢献のプロジェクトの実行の難しさを痛感している。

そこで、複数人数で集合できないなか、「三密」を避け、「SDGs」の17の目標に基づいた活動を考え、一人一人が「自分個人の身の丈に合った『SDGs』」活動の動画を撮り、その意図を体現しようという企画になった。最終的に一つの動画にまとめ、最終的な目標として工夫や創意を施しより良い一つの動画を作り上げることが今回の活動方針である。



詳しい内容は  
本学ホームページで  
ご覧いただけます。



最終成果の動画より

## 郊外団地・商店街における 共生空間づくりプロジェクト

### ■演習担当教員、学生

岩館 豊、学生 13 名

### ■連携先

NPO 法人 Going to Concern for Women

### ■トピック

コロナ禍におけるローカルイベントの模索

### ■プロジェクト概要

今年度の郊外団地・商店街における共生空間づくりプロジェクトでは、コロナ禍でのローカルイベントの模索として、「お家でハロウィン」イベントを企画・運営した。

新型コロナウイルス感染症の影響によって、このプロジェクトが参加を予定していた、埼玉県三郷市・みさと団地での夏祭り（自治会主催）とハロウィンイベント（商店街組合主催）は共に中止となった。団地の子どもたちが毎年楽しみにしていたイベントがなくなるとともに、プロジェクトとしても連携先での中止決定を受けて、ゼロからの模索となった。夏に入ったところで、みさと団地商店街でイベントスペース「イロトリドリ」を運営する NPO 法人 Going to Concern for Women さんと協議していくなかで、感染症対策を行いながら、少しでも子どもたちがハロウィンを楽しめるイベントを行うこととなり、プロジェクトが具体的に動き始めた。

学生たちは、オンラインで意見交換を重ねながら、最終的に次のような企画を考案した。①感染症対策で使用されているフェイスシールドを使って仮装用のお面づくりができる製作キットを作り、それを「イロトリドリ」で配布する。②イベント参加者は自宅で材料を自由にアレンジしながらお面を作る。③ハロウィン当日にイロトリドリにお面をつけてきてくれればお菓子をもらえる。以上の内容で、10月16

日に配布、10月31日にイベントを実施した。当日は、用意したキットとお菓子は全てなくなり、仮装と感染症対策をした子どもたちの笑顔とともに、無事終了した。学生たちは、コロナ禍でローカルイベントが難しいなかで、感染症の対策をしながら今できることを模索し、実現していった。その前向きな姿勢と臨機応変な取り組みは見事だったと思う。

なお、上記企画について、団地の子ども達が「楽しみながら感染症対策を学べる」という着想は、例年ハロウィンイベントを主催されてきたみさと団地・そば酒房はなわの皆さんからご教示いただいた。ここで御礼を申し上げたい。また大変な状況の中、NPO 法人 Going to Concern for Women さんには連携していただき、心から感謝申し上げたい。

詳しい内容は  
本学ホームページで  
ご覧いただけます。



フェイスシールド製作キットに同封したちらし

## コロナ禍における地域活動 —まちラボふじみ野の2020年度活動—

コロナ禍第一波の4月に開始された2020年度の活動は、従来の活動方針を大きく変えながらの実施となった。将来を予測できない状況の中、学生と検討会を重ねながら活動案に修正を施し、実施しようと思うと状況が変化し中止となることも繰り返された。教職員のみならず学生には大きな負担をかける幕開けとなった。

まちラボふじみ野の活動方針の一つに「地域をキャンパスに」がある。これは、学生は大学内のみで学習するのではなく、地域をキャンパスに様々な主体と関わりを持つ中で教育され、学生はそこで培った成果を社会に還元することで、学生と地域が一体となって成長していく仕組みづくりである。学生と地域が共に成長することで「まちづくり」が完成されていくという考えである。しかし、この「学生－地域」のつながりは、コロナ禍で大きな変容を余儀なくされた。最も大きな変化は、「学生－地域」のつながりが大きく制限されたことである。

まちラボふじみ野では、郊外型まちづくり：キャンパス周辺の地域活性化、地方型まちづくり：福島県郡山市の農村地域の活性化の2つの活動を柱としている。しかし、地方型まちづくりについては、今年度は実施していない。

郊外型まちづくりについても、いままでつながりをもってきた大学周辺の商店会や町会の方々は高齢者が多く、大学も地域も若者と高齢者との接触を避けるよう対応しなければならなかった。また、福島県郡山市との都市－農村交流活動も同じである。一方、地域活性化のカギとなる子どもたちとの交流活動も、高齢者同様、密を避けるために中止せざるを得ない状況となってしまった。

そんな中で、世代別の情報ツールを模索する年ともなったのが、2020年度である。

### 1. 地域新聞の取り組み（高齢者層への情報発信ツール）

地域を生活圏とする高齢者や子どもたちとの交流を極端に制限することは、「学生－地域」のつながり方を従来にはない方法で再構築することとなり、また、SNS等のオンラインサービス活用に不慣れな高齢者、子どもたちとは、別の方法でつながりを維持する必要性が発生した。

このような状況下で効果的であったのは地域新聞の発行であった。これはコロナ禍以前から実施していた取り組みで、学生が地域情報を収集・発信する手段として活用されていたものである。紙媒体で情報を送り届ける地域新聞は、ポストに投函する、あるいは、市の教育委員会に協力していただき学校へ配布されることで、なんとか心の交流をつなぎとめようとするものとなった。働き盛りの世代には当たり前となってきたリモートワークであるが、地域新聞は、パソコンなどの情報端末操作に不慣れな世代との情報格差を埋めるための方法と

して効果的な方法であることを改めて感じさせるものとなった。

しかし、地域新聞は学生から地域へ情報を発信する一方通行の媒体でもあり、双方向のツールとしての活用法が今後の課題となる。学生たちとも話し合い、新たなアイデアで交流を維持する手段を提案していきたい。



地域新聞「ぶんぶん新聞」創刊号  
子どもたちから収集した「うまい棒ランキング」結果のお知らせ

## 2. オンライン学園祭への参加とオンラインワークショップの開催 (若者、ファミリー層とのコミュニケーションツール)

学園祭(あやめ祭)がオンライン開催となったことをきっかけに、オンライン投票による「駄菓子総選挙」を開催した。QRコードからアンケートサイトに入り、好きな駄菓子を選んで投票してもらうという簡単なアンケートであるが、大人も子どもも、楽しんで参加してくれた。

さらに、アンケート回答者に呼びかけ、オンラインの「キャンディーブーケワークショップ」を開催した。これは、身近な折り紙などの文具をキャンディに見立ててブーケを作るオン



作品を手にしたキャンディーブーケワークショップの参加者の皆さん

ラインワークショップである。地域住民との交流を維持することが一番の目的であり、皆が語り合い、アイデアを出し、地域が祝福されるブーケを皆と作ってみようがコンセプトとなっている。オンライン参加となるため、地域の若い世代、特に子どもを持つ主婦層の交流を目的とし、効果を見込めるワークショップでもある。

オンラインあやめ祭で開催したオンラインイベント、その後を引き継ぐ形でのオンラインワークショップは、子どもを持つ主婦層から若者、小学生までが参加するイベントとなり、with コロナ時代のイベントのあり方を垣間見ることができた。



あやめ祭の駄菓子総選挙参加呼びかけの様子。オンラインで呼びかけることにより、多くの方が参加してくれた

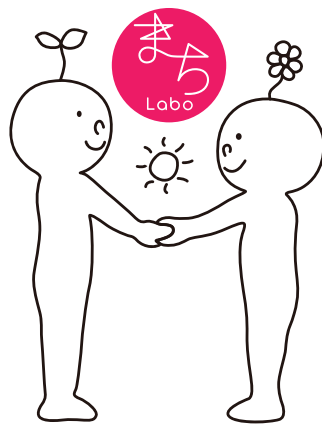
### 3. ロゴマークデザインワークショップの開催

地域活動には、それを象徴するアイコンとしてのロゴマークがあることが望ましいとされる。まちラボふじみ野では、ふじみ野市内のプロのデザイナーを講師として招き、リモートでのロゴマークデザインワークショップを実施した。デザインの主体は学生であり、ワークショップを重ねながら、イメージやコンセプトを「絵」や「言葉」で表現する練習を重ねた。単にロゴを作るという目的ではなく、どのようなデザインにしていくのかをみんなで話し合う中で、徐々に具体的なかたちが見えてくるとともに、これからの活動のイメージを膨らませていこうとするものである。

いずれにせよ、しばらくはコロナ禍での活動となることが予想されるため、まちラボふじみ野の活動は、ハイテク、ローテクを組み合わせた新たな方法で一歩ずつ進めていくことになるであろう。

詳しい内容は  
本学ホームページで  
ご覧いただけます。





まちづくり研究センター Social Design Center

---

## 文京学院大学まちづくり研究センター 報告書 2020年度

---

発行日 2021年3月31日

編集・発行 文京学院大学まちづくり研究センター

### 【まちラボ本郷】

〒113-8668 東京都文京区向丘1-19-1

TEL: 03-6240-0897 FAX: 03-6240-0898

### 【まちラボふじみ野】

〒356-8533 埼玉県ふじみ野市亀久保1196

TEL: 049-261-7859 FAX: 049-261-7864

---